

原爆文学研究会報

第四七号

原爆文学研究会 二〇一五年六月

ヴェニスへのゲットーにて 徳永恂著『ヴェニスからアウシュビッツへ』を読み、感銘を受けてから七年が経った今年三月、ようやくヴェニスを訪れる機会を得た。国鉄サンタルチア駅を左手に見ながら商店街を突抜け、小さな橋を渡って左手の路地に入った所に、目的地へと続く入り口はひっそりと佇んでいる。'Ghetto Novissimo'という標識に見られるように、この地域には、かつてユダヤ人ゲットーが存在していたという。第二次大戦期、ナチスの侵攻により「ヴェニスへのゲットー」からは、人口の五分の一が老若を問わず連行され「たという徳永の記述もさることながら、森鷗外訳の『即興詩人』にて、「両辺の家に住める人は、おのおの六層楼上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の並び行くことを許すなるべし」と述べられているように、この区画はどこか血なまぐさく、陰鬱でただならぬ雰囲気醸し出しているのだとばかり思い込んでいた。しかし、文献からの先入観に反し、この地からは何ら特異な印象は受けなかった、というのが正直な感想である。ともすれば、ヴェニスのごくかの路地を一つ入れれば出くわすような光景がその地には広がっており、ゲットー中心部にある広場のホロコースト祈念碑がなければ、殺戮の歴史を思わせるような不穏な空気は何もない。そこにあるのはただ、中世から存在していたであろう高い建物の羅列であり、ベランダには平穩にも花が飾られ、見上げた空には白い洗濯物が、路地には、暇そうに団欒する住民達の姿があった。予想外の光景を目にした時、ある感情が沸き起こってきたのは、何故だろうか。

ふと、この感覚は、身に覚えのあるものだということに気づいた。子供の頃、長崎の爆心地付近に住んでいた。庭に洗濯物を干す母を見つめる時、公園でラジオ体操をする時、蒲鉾屋のおばさんと話をする時、

あるいは、浦上天主堂の鐘の音を聞く時、ふと、原爆の日もこういう感じだったのかな、などと漠然と思っていた。通学路は、途中に如己堂を通り過ぎる以外においては、日本のどこにでもあるような風景であったと記憶する。学校では度々、平和学習があった。その度に、もし、また原爆が長崎の同じ場所に投下されたら、私も両親も絶対に助からないであろうと思うと、憂鬱な気分になった。こうした子供の心配とは裏腹に、永遠に続くかのように思える線的な日常はそこにあった。その日常の一部に自分が組み込まれていることを認識する度に、不安を覚えた。何故だろうか。一九四五年八月九日の朝が、一九九五年のある日の浦上の朝と同じに成り得ることを、幼い私は無意識に感じていたのだろうか？

ゲットーとナガサキを時空を超えて結びつけたのは、人々の日常生活の営みであった。そうした営みの恒久性が保証されていないことは、歴史を経験した私たちには明らかである。洗濯物を干す女性が突然連行され、列車に詰め込まれたのかもしれないし、蒲鉾屋の店主と客の会話は、不自然な形で中断されたかもしれない。人々の日常と、それを切り裂く暴力性は常に隣り合わせなのかもしれないと考えた時、戦慄を覚えた。(永川とも子)

第四七回 原爆文学研究会報告

二〇一五年三月七日(土)、八日(日)に、長崎大学で第四七回研究会を開催しました。初日は二つの研究発表がありました。二日目は、午前中に「戦後70年」連続ワークショップV「原爆文学「古典」再読2」佐多稲子『樹影』を行い、午後から連続ワークショップVI「長崎原爆



と復興の言説」を行いました。

初日の石川巧氏の研究発表に対しては、「自分が居合わせない場面の記述の質をどう考えるか」、「見る側と見られる側が同じである視点のねじれについて考えを聞きたい」、「一カ所だけ「私」となっている部分についてどう考えるか」等の質疑がありました。

高山智樹氏の研究発表に対しては、「具体的な読まれ方、受容のされ方について聞きたい」、「階級や世代という作品設定について、運動レベルで交差していたのかどうか」、「絵本のビジュアルイメージについて、他作品との比較が必要ではないか」等の質疑がありました。

二日目のワークショップVの発表に対しては、「昭和三〇年代の華僑が置かれた状況、場所性について聞きたい」、「墓参が繰り返して出てくるが、小説の時間構造をどうとらえるか」、「黒い雨」と比較した場合に、作品の評価や表現をどう考えるか」等の質疑がありました。

ワークショップVIの発表に対しては、「英語における「復興」のニュアンスの違いはどのようなものか」、「永井隆の言説は国民レベルでどのように受容されたのか」、「復興しようとして復興できない「残余」をどのようにとらえるか」等の質疑があり、二日間にわたって活発な討論が行われました。

◇ 研究発表1

ジエノサイドとしてのシベリア抑留

——長谷川四郎「小さな礼拝堂」論——

石川巧

長谷川四郎の「小さな礼拝堂」（『近代文学』一九五一年八月、のち『シベリア物語』一九五二年、筑摩書房）は、長谷川四郎自身のシベリア抑留体験に基づいて書かれた短編小説である。針生一郎が「抑留生活の初期には、発疹チフスがはやって一日平均一人が死んだが、それを克服してようやく死と距離ができたとき、有刺鉄線でかまれた建物のなかに木の寝台をおいた、定員一人の死体置場がつくられ、これが「小礼拝堂」とよばれたのです。ここに入ったのは、炭坑の坑道で丸太の下敷になった男と、茸にあたって死んだ男、それにもう一人逃亡常習の男でした。（中略）こういう事実を、残酷な処置に抗議するでもなく、まして逃亡者のヒロイズムに同調するでもなく、あくまで冷静に淡々と叙述するのが、『シベリア物語』の特色です」（長谷川四郎と大陸の空、日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』一九七八年二月、毎日新聞社）と要約したように、この作品を含めたシベリア物語に関しては、その淡々とした叙述の仕方に注目する言説が多い。

また、長谷川四郎自身が「ごく最近、五木寛之氏にお目にかかった時、氏は『シベリア物語』はのんきな本で捕虜生活の苦しみが出てないですねと言った。もしそうだとすれば、それは罪ある者として私がよくこんでシベリアに服役したためかもしれないと考える」（『私の処女作』『シベリア物語』、『週刊言論』一九七一年一〇月二十九日）と回顧したように、この作品は捕虜生活の苦しみを「のんき」に描いている印象を与える点において識者を困惑させるところもあつた。戦後の日本人にとって、シベリア抑留は悲惨な出来事でなければならず、飢餓に苦しんだり望郷の

念に囚われたりする人物が登場しない「捕虜生活」を小説化する長谷川四郎は、その枠組みの外側に棲息する異端作家として認知されてきた。

今回の発表では、長谷川四郎の作品と石原吉郎の言説を合わせ鏡のように組み合わせることから出発し、「告発」という態度を取ることの不遜さ、被害者／加害者という短絡的な図式で思考することの不毛さ、「記憶」として過去を再生しようとするものの可能性／不可能性という問題から出発した。また、従来、大量殺戮＝死の計量化という観点で捉えられることが多かったジェノサイドを文化殲滅の観点から再考し、「小さな礼拝堂」には人間の尊厳に対する破壊・妨害行為としてのシベリア抑留が描かれていること、そこには、偶然生き残ってしまった人間としての自己認識、死者と生者は完全に切断されているという確信が示されていることなどを明らかにし、最終的には、ジェノサイドという認識のあり方そのものの限界にも迫るとともに、それを原爆文学研究に接続していく方策を示した。

◇ 研究発表2

"Protest and Survival"?

——イギリス非核武装運動と"When the Wind Blows"——

高山 智樹

現実に核兵器の被害を受けていない欧米諸国においては、「核」を主題にした文学は、主として未来に起こりうる核戦争を描き出したものとならざるをえないが、とりわけ、ヨーロッパにおける限定核戦争の可能性が高まった一九八〇年代前半には、そのような作品がヨーロッパ各国で数多く発表された。

本発表では、そうした作品の中から、一九八二年にイギリスで発表されたレイモンド・ブリッグズのカートゥーン形式の絵本『風が吹くとき』を取り上げ、それを同時期にやはりイギリスで発表された他の二作品と

比較することで、冷戦下において、核戦争を「想定した／シミュレートした」作品を書くことの意味について考察した。

この時代は、核戦争が起こったという「想定」の下で、爆風や放射能にどのように対処すれば生き残ることができるかを説明したイギリス政府作成のパンフレットが話題になった時代でもあり、そのパンフレットは、内容のあまりの非現実さから、反核団体などの激しい批判を受けたが、実は核戦争を「生き延びる」という、そこでの「想定」は、「核戦争後」を描いた多くの作品にも共通したものである。それに対して『風が吹くとき』は、公的なパンフレットの指示を実践しても「生き延びる」ことはできないことを冷酷に描き出したという点において、「核戦争後」を「想定」すること自体の愚かしさを指摘したものとなっているのだ。

また、作者の両親をモデルにしたという『風が吹くとき』の主人公の老夫婦の姿は、核戦争のシミュレーションという発想の階級性、さらに言えば核兵器という問題それ自体が持つ階級性の指摘としても読むことができる。この指摘は、同時代に盛り上がった反核運動においても、ともすれば見過ごされがちだったものであるが、実のところ核兵器の階級性を目を向けるということは、核兵器という問題の責任の所在を曖昧にしない視点なのであり、「核」を考える上で欠かせないはずのものなのであった。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップV

原爆文学「古典」再読2

——佐多稲子『樹影』報告

松永 京子

本連続ワークショップでは、前回の井伏鱒二の『黒い雨』に引き続き、原爆文学「古典」再読の第二弾として佐多稲子の『樹影』を取り上げた。坂口博氏と村上陽子氏による具体的な作品論の導入として、司会者の松

永は佐多稲子の経歴と作品を紹介した。

作家の実生活や時代背景が色濃く反映された佐多稲子作品のテーマは、主に以下の五つのグループに分類することができる。①階級問題、②女性問題、③戦争協力・戦争責任をめぐる問題、④共産党内部対立など政治思想の問題、⑤その他の社会問題。⑤には、公害、反核、原爆などが含まれる。一九四八年から一九六七年の長崎を舞台とした『樹影』は、入市被曝体験を持つ二人の登場人物——妻子を持つ画家麻田晋と長崎に生まれた華僑柳慶子——の関係、そして二人が病気を発症し死に至るまでを、②や④のテーマに絡めながら描いた作品といえる。

佐多稲子は『樹影』以前にも、「歴訪」（一九五一年七月）、「今日になつての話」（一九五二年）、「色のない画」（一九六一年）、「落葉」（一九六九年）など原爆を中心とした作品のなかで、『樹影』に繋がる登場人物やテーマを取り上げてきた。例えば「色のない画」の「Yさん」や「落葉」で言及される「女友達」は、被曝を経験した華僑の心情に注目したという点において、『樹影』と共通点を持つ。また、短編「歴訪」の「長崎の人たちは、誰もあのとのおそろしさを話しながらなかった」「みんな黙つとりますけど、夕方のあの淋しさは、あそこにおいてみなきや分かりません」と（講談社文芸文庫『私の長崎地図』一四〇、一五五頁）といった箇所などは、坂口氏が注目した「語られなかった」人々の存在や、村上氏が論じた「孤独の諸相」とも関連してくるだろう。

参加者全体の討論では、「ながさき」表記を用いたのはなぜか、麻田晋の妻邦子の存在をどう捉えるか、「語る」ことによって「語られない」ことは何か、といった数多くの示唆的な問題が提起された。本研究会において、これまであまり取り上げられることのなかった作品ではあるが、このワークショップをきっかけに、さらなる『樹影』研究が行われることを願ってやまない。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップV

原爆文学「古典」再読2——佐多稲子『樹影』

福岡千鶴子と醇次郎——鎮^{レクイエム}魂の通奏低音

坂口博

「樹影」主人公ふたりのモデルについては、かなり明らかにされている。題名の典拠となった池野清の絵も知られている。また、ふたりについては他の短篇小説・随筆にもたびたび描かれてきた。「色のない画」（61年）「落葉」（69年）などである。

それらの「長崎作品」を読み進めるなかで、大きく浮かびあがってきた、実在した福岡千鶴子を今回は取りあげた。夫は醇次郎（1904〜86）、戦前からの日本共産党活動家である。彼の検挙・入獄によって長崎から東京へ出ていた千鶴子は、稲子宅で一年余りを暮らした。この経緯は「視力」（40年）の題材となり、三菱兵器工場で爆死した千鶴子については「歴訪」（51年）「仕合せと命と」（55年）「時に佇つ」（75年）と繰り返し語られる。「樹影」でも、「麻田晋の親しい友人」と「彼の妻」の話として触れられる。

些細な挿話に見えるが、冒頭の文脈は「あの人たちは何も語らなかつただろうか。……本当に何も語らなかつただろうか。……たしかに饒舌ではなかつた」から、麻田晋と柳慶子に限定される「この人たち」へ転換する。ここは、「あの人たち」に、具体的な親友夫妻を想定せずには、読解ができない。「妻の死を語らない親友」夫妻は、読み過ぎすことのできない存在である。さらに「あの人たち」には多数の人々、とくに原爆の死者たち全般が射程に入ってくる。むしろ、作品の全体には「妻」の末期の声が、通奏低音として響いていると解釈してもかまわないのではない。作者は一九五六年の原水禁大会では福岡千鶴子を「胸において黙禱」（「故郷の瘡痕」）したし、印象深かつた彼女の「視線」を記憶し

つづけ、「死の間ぎわはどうだったのであろう」（時に佇つ）と考える。

「樹影」を書き上げて、長崎への鎮魂は終らなかつた。

なお、作者が池野清と知り合つたのは福岡夫妻の縁だつたことも指摘しておきたい。

◇ 「戦後70年」連続ワークシヨップV

原爆文学「古典」再読2——佐多稲子『樹影』

孤独の諸相——佐多稲子『樹影』によせて

村上 陽子

佐多稲子『樹影』は、長崎を舞台とし、画家の麻田晋と喫茶店を経営する華僑の女性である柳慶子の二人を軸に展開する長編である。「あの人たちは何も語らなかつたろうか。あの人たちは本当に何も語らなかつたろうか」という言葉で幕を開ける『樹影』において、麻田や慶子をはじめとする長崎の被爆者の沈黙と孤独は重要なテーマとなっている。特に麻田と慶子が被爆者であること、慶子が華僑であることは、この二人が強く惹かれ合いながら同時に結び合うことのできない孤独を生きなければならなかつた原因としてしばしば問題にされてきた。しかし麻田と慶子の孤独は位相の異なるものであつたはずである。本発表では、麻田と慶子の意識の変化をたどり、孤独の背景にある問題を探っていくことを試みた。

麻田も慶子も当初は自分を被爆者だと意識しておらず、被爆の記憶は生々しくそれぞれに刻まれてはいるものの、それを語り合うことはなかつた。しかし残留放射能の危険性が明らかに、体調に変化があらわれるにつれて、二人はそれぞれに不安を増大させていく。特に麻田はその不安を誰とも分かち合えないまま、孤独の中で病に倒れていってしまう。麻田の死後、日中友好の活動や原水禁運動に積極的に参加していった慶子は、その活動を通して華僑の被爆者である自分と、日本人の被爆者として死んだ麻田との結びつきを確認しようとしていた。しかし彼女はこの奮闘によって

長崎で静かに暮らしを営もうとする妹や親戚、新地の住人たちから浮き立つた存在となり、糸が切れたように唐突に死を迎えてしまう。

沈黙し、痛みを抱えて「戦後」の長い時間を生きた人々に着目するとき、個々人が抱える孤独は一つの要因に還元できない、重層的で複雑なものとなつてたちあらわれる。壮大で詳細な『樹影』の記述から個別の孤独を拾い上げていくことは、多様な体験や戦後の生のあり方をたどりなおすことにつながっていくのではないだろうか。

◇ 「戦後70年」連続ワークシヨップVI 長崎原爆と復興の言説

長崎原爆の復興をめぐる詩と記録

楠田 剛士

これまで原爆文学研究会では、長崎原爆に関して多様なテーマが取り上げられてきた。中でも永井隆の言説の功罪と被爆者の表現は繰り返し議論されている。一九四五年から五〇年代の永井や被爆者の言葉は、被爆から復興に向かう時期に発せられた。被爆という出来事をどう記憶するのか、現在の状況をどう把握するか、そして未来をどう描くかという、広島や福島にも広がる「復興」の語りの問題を、長崎を事例としながら考えようとしたのが本WSである。

報告では、まず地元紙における八月九日の語り方について検討した。毎年八月九日は「世界に平和を誓う」（「長崎日日」一九四九・八・九）日であると同時に、一面に見られる、「復興」という見出しと長崎の遠景写真が伝えるように、復興の進み具合を確認する日にもなつていた。被爆一〇周年の一九五五年に平和祈念像が完成するが、祈念像はまさに平和と復興の両者を統合したモニユメントであつた。

次に平和祈念像に関する詩や短歌について検討した。五五年八月九日の「長崎日日新聞」には、平和祈念像完成を言祝ぐ記事や詩や短歌が掲載されている。一方、同日の朝日新聞「ひととき」欄に掲載された福田

須磨子の詩「ひとりごと」では、祈念像の「それはいい」と認めつつも、「いいけど」という逆接によって違和感も示されており、「そのお金で何とかならなかったかしら」という、別のあり得たかもしれない復興の可能性も語られていることを指摘した。また、福田の詩が生まれる背景に被爆後の住宅難の経験があることを福田の生活記録を基に検討した。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップVI 長崎原爆と復興の言説

「浦上五番崩れ」としての原爆

篠崎 美生子

「原爆は神の摂理」（『長崎の鐘』）とする永井隆の〈浦上燔祭説〉に対しては、政治的批判はなされてきたものの、〈信仰〉の側面に斬り込む批判はされてこなかった。だがこの言説は、〈信仰〉においてこそ批判されねばならない。それは、この言説を貫く、大戦の罪が許されるためには「適当な犠牲を献げて神にお詫びをせねばならない」とする発想、また他の「全滅した都市」ではなく「聖地浦上」こそが犠牲として神の目になつたとする発想が、「新約聖書」の理念と食い違うからばかりではない。浦上の被爆を一種の殉教としてとらえる考え方——つまり「浦上五番崩れ」として原爆をとらえる考え方が、フィクションだからである。

〈浦上燔祭説〉を支えているのは、「迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し」（『長崎の鐘』）たという「浦上」観である。しかし、近年の所謂「潜伏キリシタン」に関する研究によれば、少なくとも「浦上四番崩れ」を除いては、浦上の信仰と迫害の連続性は認められないのだ。

ところが近代以降、浦上のキリシタンを語る物語は次第に脚色が強められ、まさに「四百年」の浦上迫害史が形成されていった。浦川和三郎から片岡弥吉に受け継がれて流通したこの物語をバックボーンに、永井の〈浦上燔祭説〉は成立したと言える。永井が片岡の勤める純心学園のために「燔祭の歌」を献げ、片岡が永井の伝記を記すなどによって、いわば組織的に、

原爆は「浦上五番崩れ」としての意味を付与されたと言えよう。

浦上迫害史も、〈浦上燔祭説〉も、死を権威によって意味づける欲望をみたくものである。その方法が〈人間疎外〉からの回復ではなく、人間をますます権威に奉仕させてしまうことは、永井の言説が原子力の賛美になだれ込んでいくことからわかる。

権威と結託した言説が、ひとりひとりの言葉をどのように抑圧したか、し続けているか、3・11後の現在、改めて問うべきではないか。

◇ 「戦後70年」連続ワークショップVI 長崎原爆と復興の言説

長崎の戦災復興事業と平和祈念像建設

新木 武志

幕末期に鎖国体制下の特権的な地位を失った長崎では、明治期から長崎港を中心に造船や水産業、軍需産業、観光による長崎の振興が図られた。昭和期に戦争が激化していくと、軍需産業だけが拡充されていたが、軍需関連工場が集中していた長崎市北部の浦上地区は原爆によって壊滅する。その一方、長崎港を中心とした旧市街にあつた主要企業の施設や幹部らの被害は限定的なものであつた。そのため、戦後の長崎市では、戦前からの指導者層によって、戦争で中断していた港湾都市・観光都市とする構想が示され、旧市街中心に復興が始められた。そこでは、「平和都市」建設という発想はなく、「被爆者」もただの「戦災者」として特別視されることはなかった。長崎市が「平和」をアピールするようになったのは、一九四九年に広島市による国庫補助をえるための特別法制定の動きに便乗し、広島平和記念都市建設法とともに長崎国際文化都市建設法を成立させたときからである。

平和を掲げるようになった長崎市は、原爆犠牲者の慰霊と平和の祈念のためとして、一九五一年に爆心地に平和祈念像の建設を決定する。ところがその後、平和祈念像をめぐることは、これを平和や長崎のシンボルとするとともに観光にも利用するために、建設場所を旧市街にある風頭

山頂に変更を求めた請願が、市議会に提出された。その後、地元紙の投書欄などで、建設地をめぐる論争がくり広げられることになったが、その紙面からは、請願を支持したのは市議会議員をはじめとする旧市街の人たちであったことが確認できる。つまり、長崎の復興が港湾都市・観光都市をめざし、旧市街中心に進められるなかで、平和祈念像もそのなかに位置づけられようとしたのである。これに対して、爆心地を主張していたのは、浦上地区の人たちや原爆犠牲者の遺族らが中心であった。最終的に請願は、市議会議員の大多数がその紹介議員となっていたにもかかわらず、否決されたが、それは遺族らをはじめとする犠牲者の慰霊を求める声を無視できなくなっていたことを示している。

ただし、平和祈念像が完成し、平和公園が整備されていくと、これらは観光地化していき、祈念像への批判も根強く続くことにもなる。その一方で、平和祈念像の建設地をめぐる対立した旧市街の議員のなかには、その後、占領の終了とビキニ事件後に原爆被害に対する関心が高まり、「戦災者」が「被爆者」として認識されていくなかで、被爆者運動や平和運動に関わっていく者もあらわれる。こうして、平和祈念像建設は長崎における被爆者運動や平和運動を準備することになった。

ワークシヨップV印象記

渡邊 英理

二〇一五年三月七日から八日、長崎大学で行われた第四七回原爆文学研究会に参加した。はじめての参加であり、また都合により、すべてのプログラムに参加することは叶わなかったのだが、事務局からの依頼を受け、以下、八日午前中に行われた「原爆文学「古典」再読2」をめぐる報告と感想を記してみたい。

「原爆文学「古典」再読」は、第四六回研究会から試みられた企てで、今回で二回目の企画ということである。前回の課題図書は、井伏鱒二の『黒い雨』、今回は開催地である長崎出身の作家、佐多稲子の『樹影』であつ

た。司会は、松永京子氏、提題者は、坂口博氏、村上陽子氏の二人である。

まず、司会の松永氏から、氏自身がまとめた年譜をもとに、著者佐多稲子の略歴が説明された。また時間の関係で詳細な解説は割愛されたが、『樹影』の梗概と詳細な物語年譜／関連歴史年譜をもとに関連作品との関係性が提示され、提題の端緒が開かれた。

つづいて一人目の提題者、坂口氏は、『樹影』の「主人公」柳慶子と麻田晋、二人の物語を「挟み込」む「親友夫婦」の「挿話」に、モデルの詳細な調査を加えながら光をあてた。この「親友夫婦」とは、活動家であった夫を支え続け原爆で生命を落とした妻と、その妻の死に「長崎の痛恨を抱いている」麻田の親友である夫である。この「親友夫婦」のモデルは、福岡千鶴子と醇太郎だとされるが、小説において、その夫婦と「主人公」たる柳慶子と麻田晋の二人とは時に対照的にすら見える。原爆で妻を亡くした夫（親友）と、原爆で妻邦子をなくさずにすみながら、柳慶子と「不倫」関係を続ける夫（麻田）。夫を支える献身的な妻（麻田の妻）と、悩みながらも妻子ある男性との恋に生きる「奔放」な女性（柳慶子）。「貞淑」と「不貞」、「夫婦」と「不倫」といったジェンダー配置と断は、メランコリーの相違を伴いながら、「在日華僑」と「日本人」というエスニシティや「ナショナルな境界」によっても多層化されている。

原爆によつて一瞬でその生命を落とした親友の妻／福岡千鶴子と同じく、この小説の中で、やがて、麻田晋も柳慶子も、死に至る。麻田晋と柳慶子、「主人公」二人の死に小説が向かい、結果、その死の過程それ自体を小説が語っていることになるのに対して、麻田の親友は、自ら「妻の死について殆ど語ることがない」。小説が語る麻田晋と柳慶子、「主人公」二人の死の過程と、残された夫によつて語られない麻田の親友の妻の死。坂口氏は、「主人公の物語」の余白にある、語られない死者の記憶を、「鎮魂の通奏低音」として強調した。

二人目の提題者、村上氏は、先行研究の丁寧なまとめ、解説を行い、そのうえで、柳慶子と麻田晋の「孤独」の問題を掘り下げていった。な

かでも、「被爆者ではない／被爆者である」という意識の変容、慶子の〈華僑〉としての意識に即して、その「孤独」の内実が検討された。そのプロセスを通して、村上氏は、しばしば麻田と慶子二人のものとしてまとめられたり、あるいは、「被爆者」や「華僑」という点に集約されていた「孤独」を、微分化する作業の重要性を提起した。

死者という「当事者」は、その死を、その死の無念を語ることはできない。麻田のような人物も、そして、「在日華僑」であった柳慶子のような人物もまた、一定の疚しさや後ろめたさを抱え、それぞれの事情でながしかを公には語るができない。そして、その語ることで、なさは、戦後のジェンダー配置や冷戦期東アジア体制／日本の戦後体制の中で、より複雑で入り組んだ網の目として個々の「当事者」を捕縛し、また亀裂を与え分断した。坂口氏、村上氏の発表を聞く中で、主流言語の中で表立った「居場所」を与えられなかった死者／被爆者の語れなさを、ある点では「秘密の恋」というメロドラマ的要素に託しながら、その雁字搦めの網の目と入り組んだ亀裂分断そのものの中で、この小説は影写しているように思われた。

討議の中では、慶子が政治化していく小説後半部分の可能性と不可能性についても、議論になった。その過程とはまた、慶子が自らを「華僑」として自認し、自称していく過程である。討議の中で、村上氏も、「名づける」という問題系への注意を喚起していたが、当時の社会的文脈を振り返り、それを踏まえた詳細な検討を加えることで、新たな声が浮き彫りになる可能性もあるだろう。同時代の出来事の最中では見えなかったものを浮上させる、ある一定の時間的空間的な距離。「古典」再読の意義は、その距離からこそは、じまる。

「原爆文学」を読む共同の場に自らをおいた今回の経験を、戦後七〇年を迎える今年の思考／運動の、ひとつの基点としていきたいと思う。

ワークシヨップVI印象記

東村 岳史

二〇一三年三月十六日、NHKで「ヒロシマ 復興を夢みた男たち」という番組が放映された。「原爆市長」といわれた浜井信三を取り上げたもので、番組冒頭のナレーションによると、東日本大震災後に彼の本が復刊されて被災地に送られたとか。番組の制作も本の復刊も被災者を励ますという善意から生じたものではあるが、物事を斜に構えてみる私は、これは「復興イデオロギー」ではないかと思つたのだつた（新木氏が報告の冒頭で同年八月のNHK「復興 長崎原爆市民の記録」にふれ、番組で描かれていた中部悦郎像が自分の理解と異なると述べておられた点にも通じると思う）。

もちろん、東日本大震災と広島・長崎を結びつけるのがいけないわけではない。東日本大震災後だからこそ、かつては十分ではなかった視点が深められるということもあるだろう。たとえば、東日本大震災を「複合災害」と呼ぶ研究者が増えてきているようだが、二つ以上の災害が連続しなくても、被害を考えるには複合的な視点が必要ではないか。楠田氏がコメンテーターの桐谷氏の論考から、「歴史、政治、社会、経済、法律、思想などの多角的な視点から、復興の分析は取り組まれるべきである」という一節を引用しているのも、そういう発想からであろう。

復興言説が復興を言祝ぐものだとすれば、そして復興のポジティブな側面を強調すればするほど、復興を実感できず取り残された人たちは日陰に追いやられ、声もあげにくくなる状態を生み出すとすれば、復興への違和（カツコツきの「復興」になるだろう）を表明することは切実な問題である。楠田報告が取り上げた福田須磨子の文章は、まさに被爆者の切実さを表明するものであった。また、永井隆に事寄せて、福島第一原発事故に関わる自分の仕事を位置づけようとする研究者が現に存在するからこそ、篠崎報告のようなシャープな批判がいま求められているのだろう。こう考える私にとっては、いままな「復興」を問うのかというの

は十分納得できることであつた。

ただ、この種のワークシヨップの常として、個々の報告を越えて論点を深めるには至らなかつた感に残る。思想面を扱つた楠田報告・篠崎報告と、政治・社会・経済面を扱つた重厚な新木報告が接合されて議論されなかつたのは残念であつた。その場に居合わせながら議論に貢献できなかった私にも責任はある。今後の仕事で少しは貢献できるだろうか。

彙報

第四七回 原爆文学研究会

○日時 二〇一五年三月七日(土)、三月八日(日)

○会場 長崎大学

○研究発表(一日目)

発表1 ジェノサイドとしての原爆

——長谷川四郎「小さな礼拝堂」論—— 石川 巧

発表2 "Protest and Survival?" ——イギリス非核武装運動

~"When the Wind Blows"—— 高山 智樹

○「戦後70年」連続ワークシヨップV(二日目)

原爆文学「古典」再読2 ——佐多稲子『樹影』 司会 松永 京子

発題1 福岡千鶴子と醇次郎 ——鎮魂レイエムの通奏低音 坂口 博

発題2 孤独の諸相 ——佐多稲子『樹影』によせて 村上 陽子

○「戦後70年」連続ワークシヨップVI(二日目)

長崎原爆と復興の言説 司会 楠田 剛士

報告1 長崎原爆の復興をめぐる詩と記録 楠田 剛士

報告2 「浦上五番崩れ」としての原爆 篠崎美生子

報告3 長崎の戦災復興事業と平和祈念像建設 新木 武志

コメント 桐谷多恵子

機関誌「原爆研究文学」第一四号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一四号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮つてご投稿下さい。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一五年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇

〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇福岡市城南区七隈八一四一一

福岡大学人文学部中野和典研究室

編集後記

会報四七号をお届けします。ご執筆くださった皆様にお礼申し上げます。ここ数回は連続WSで多くの発表があり、そのぶん会報のページも増えています。編集作業は大変ですが、充実した誌面ができましたので、ご一読いただければ幸いです。次回の研究会は八月一日、二日に広島市で開催します。連続WSの最終回にご期待ください。次々回は十二月十二日、十三日、福岡市で国際会議を開催します。こちらも鋭意準備中です。詳細はホームページにお知らせしています。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一四一一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>